

作曲の心

福田 渡辺先生は、幼稚園や小学校の頃から童謡がお好きだったんですか？

渡辺 そうですね。わりあい歌は鼻歌みたいにして、いつも歌っていましたね。

小野 では、童謡の作曲家になろうと思われたのは、何歳頃でしょうか。やはり教師をなさっていたときですか？

渡辺 そうです。師範学校（現・学芸大学）時代に、友だちにさそわれて、音楽部に所属したんです。そこのスモールオーケストラのメンバーになったのが、音楽の道に入ったきっかけです。そこではクラリネットを専門にしていました。

そのうちに、作曲するのもおもしろい、と考えるようになりましてね。詞（ことば）を作ってみて、自分でクラリネットを吹いてみたりしてるうちに、だんだん周囲が、渡辺は作曲をやるらしいと知るようになって……。それから、作曲のおもしろさにのめりこみました。作曲についての理論書を読んだり、クラシックを基本としていろいろ勉強したり。ただ、当時はシンフォニーなどをつくるための学術書はあっても、子どもの歌をつくる本は、なかったように思います。

子どもの歌とは何かということは、結局子どもと接する中で学びましたから。

福田 子どもと接する中で、童謡の作曲を学んだんですね。

渡辺 そうです。作曲してすぐ、子どもといっしょに歌えるのがよかったと思います。子どもと歌ってみて、子どもの反応を見ているとその歌がおもしろいのか、つまらないのかわかりますから。子どもは正直だから、つままないと思ったら横を向いてしまいますし。

小野 子どもは、率直ですからね。

渡辺 つまらないものは、つまらないと言いますから。その歌に関して教育的な意図があっても、子どもの感覚からするとおもしろくないという場合もあるわけです。

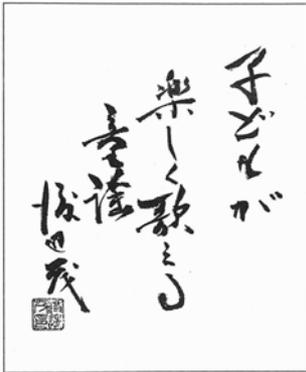
でも、子どもが好きな歌ばかりを与えているわけにはいかないんですよ。そこは教師として判断しなくてはいけない。そういったところは、自分の勉強材料のひとつになりましたね。

福田 童謡の作曲家になられたことは、先生の子ども好きという性格とやはり切り離せないわけですね。

渡辺 もちろんそうでしょうね。作曲をしていると歌っている子どもの姿が浮かんできますから。早い話が、そういう歌には血が通うわけですよ。

安尾 作曲していて、歌っている子どもの姿が目には浮かぶ。

渡辺 そうでなければ、子どもにあう歌はつくれないと思います。作曲しながら子どもの姿を思い浮かべて、この音程はむずかしいとか、このメロディーはやさしいとか、歌いやすいからいいとか、いろんなことを考えるわけです。これはありふれてるからよそうとかね。



渡辺茂氏 直筆の書

長年にわたって童謡の作曲活動をしてきましたが、「子どもが楽しく歌えること」それが童謡の基本だと思っています。

小野 作曲するときに、子どもが歌いやすいかどうかを第一にお考えになる。そうすると先生の中で子どもが楽しんで歌う姿がうかぶ。そのときは、いわば気持ちののる状態なんですか？

渡辺 そう、のるんですよ。詩を読んでもうちに子どもの姿が頭に浮かんでくる。それで自分の中の音楽性とかみあわせて、楽譜にのせていくわけです。その点では、子どもが好きだという性格が童謡をつくるうえでプラスになっているんだと思います。

福田 ご自分のお子さんを思い浮かべながら作曲されたりするんですか？

渡辺 いや、自分の子どものことは考えないですね。

それよりも、もっといろんな子ども達の様子を思い浮かべます。

安尾 では、小学校の先生をやりながら、ということがやはり大きいんですね。

渡辺 それは確かに大きいと思います。大学の先生をしていたら、どうしてもわからないところがあったように思います。

小野 私も、大学を卒業して一般の企業につとめていたら、童謡をつくろうという気はおこらなかったと思います。卒業後、子どもの教育の仕事がしたい、教育研究所をつくりたい、という気持ちから、職を探しているうちに、24歳のとき、縁があって、幼児教室につとめることになりました。それ以来今日まで幼児教育にたずさわっていますが、キラキラ輝いた瞳の子どもたちから、感動する心を学び、子どもたちのために、美しい絵本や心に残る童謡をつくりたいという気持ちになりました。